

# 民生委員活動 二十年目に想うこと



山田 喜代子

京都市職員 OG

【やまだ きよこ】1937年、京都市左京区に生まれる。錦林小学校、近衛中学校を経て京都府立鴨沂高校卒業（1955年）。1957年京都市職員採用試験に合格。住宅局、総務局、監査事務局、理財局そして左京区役所を最後に1988年3月退職。同年12月民生児童委員拝命。現在に至る。

昭和三十三年京都市に就職した二十歳をすぎたばかりの私は喜びと希望で胸をふくらませていた事であろうとそれから五十年を過ぎた今想像でしか思い出せないのが残念です。

地方公務員として、京都市民として勉強したいこと知りたいことが山程ある中で三十年もの長い時間を与えられた自分が誇らしくもあり、たのしくもあつたに違いありません。しかし当時から私の頭の中では三十年後にはきつと満足に仕事を終えて堂々と退職する計算式が自分のすがたと共に成立していた事は事実です。

時を同じくして私の人生でなすべき

こともすべて終了している予定でもありました。

結婚、出産、子育て、介護そして親の最期を看とること等々……

そしてその計画の初期に関しては自分なりの努力で実行してきたと自負していました。

ところが手塩にかけたはずだった一人娘は結婚して当然のように家を出、看とるべき双方の両親は私が三十八歳から五十歳の十年余の間にそれぞれ適当に私の手をわずらわせながらこの世を去っていきました。

その間、私の仕事面は「職場の花」的存在だった当初を除き、だんだんと

質、量共に重く大きくなっていった事はこれまた当然のことでもあります。

家庭とのはざままで思うように動けなかったこと、世帯持ちの女が仕事を続けて行く上でのいろいろな弊害や、もどかしさ等も経験しながらそれなりに成長し、職場でのポストを確保していた私でありました。

もちろんそこには公務員としてのプライドもあり仕事上での満足感も味わせていたなきながらの三十年でありました。

そんななか、定年まであと数年というところにて私はふと思いついた事があります。「これからの私」のこと

であります。

女としてはたすべき義務（例えば出産、育児等）そして自ら選んだ仕事を一生懸命こなすこと……それを「人生」というのかな……。

これから先「私の人生」のできるごと、やりたい事は何か？ いつそれをするのか……等々。

幸いなことに「人間」が大好きな自分がそこにいることに気づいていた私の頭の中に「退職」の二文字がうかんでは消えました。

どう考えてもこれまで生きてきた年数だけを生きる事は不可能な年であります。

「仕事」の他に「やりたい事」を両立させるには体力の限界と残された時間的制限を感じずにはいられない当時



の自分の立場を考え思い悩む事はたくさんありました。

ゆれる心をおさめるのに多くの時間がかかりました。これからこそがんばって若い人達を育てる側にまわれるのではないか、もったいなくはないのか等々ひきとめてくれる人も多かった中、少し早目の退職に心がかたむいていききました。三十年の間に公務員として学んだ事、身につけた事はかぞえきれない私の宝物です。その宝物を多くの人に分けてあげたい。地域の中で何かがんばってみたい。

市民と「役所」をつなぐお手伝いをしたい。多くの人は私が若い時そうであったように「役所」を知らなすぎる。公的機関を利用しきっていない。

そんな考えが頭から離れず昭和六十三年三月公務員生活にピリオドを打ったのです。

「両立」はむずかしいけれど時間を「縦」に使えば頂いた皆さんの宝物をみなさんにお返しすることができ。そんな風に考えることよって自分自身を納得させました。

それから間もなく昭和六十三年十二月、私は

民生児童委員の辞令を厚生労働大臣からいただきました。

これこそ私がやりたかったことに一番近い仕事ではなかったか？

今思ってみると私がこの辞令をいただくためにどれだけの人が動いてくださったか想像がつくだけにありがたい一枚だったと感謝しています。とはいえ一部の方々を除いて地域の皆さんとあまりお付き合いがなかった自分にこの重大な役目がつとめられるのか不安はいっぱいありました。

以前に同じ地域を受持つておられた委員の方は十五年の長きにわたってこの役目を遂行された大ベテランだといてなおさら緊張したものでした。その時以来私は民生児童委員として六回目の改選（二期三年）を経験しました。

考えてみると生まれた赤ちゃんが成人を迎える年月であります。

ほんとうに皆さんのご協力のおかげでここまでこられたと感謝の気持ちでいっぱいです。

民生委員としてまた地域の学区社協の幹部として活動することに心の底から満足していられるのは三十年間の役所生活で学んだいろいろな事が私を支えていくからだと思います。私の人生七十年の間で今が一番充実していると感じています。



ができます。

私が民生児童委員として担当する世帯数は二百五十世帯で、そのうち独居高齢者は二十七人、昼間独居は十人、高齢者世帯は十五世帯です。今ではそのほとんどの方と仲良しです。

時には手料理をごちそうしてくれる一人暮らしの男性がいたり、私のつくった煮込みうどんをおなべに入れて運んであげたりすることもあります。体の具合の悪い人には医者を呼んだり、たまには救急車に乗って病院にお供も

します。

身寄りのない何人かの人を葬儀場へ送りました。事故に遭って顔の形が変わった人の確認をした事もつらい思い出として残っています。

何年か前の十二月末病院で亡くなられた人の遺体を霊きゅう車で葬儀場へ運ぶ時にドラアイスがいっぱい積まれた車に同乗したとき、背中に異様な寒さを感じた事を今もはつきりとおぼえています。でもいづれの場合も心だけは温かかったことも思い出します。

最近民生児童委員は障害者問題、子育て支援にも取り組んでいます。障害者を家族に持つ保護者の方や子育て最中の若いお母さんから相談を受けることもよくあります。

私はどれ一つ専門家ではありませんので具体的な対応策を教えることはできませんが、そのかわりまじめな相談に対しては一生懸命お話を聞いてあげることができます。

しかるべき機関につないであげることができません。相手の方がその時にみせる何ともいえない安どの表情が私にとって次の活動への原動力となってくれます。もっと深くこの方とかわつ

てみたい。そんな気持ちをおこさせてくれたりもします。

もちろん事態がうまく運ぶことばかりではなく投げ出したくなるような事例もかぞえきれない程経験しました。

一人暮らしが無理な状態になって不本意ながら施設に入所された目の不自由な女性（当時八十歳）は、全てのご自分の持ち物を私にくれていきまして。せめてものの心の整理をされたのであろうと五年間そとそのまま私の家で保管しました。その時の荷物を私の家から処分してもう三年になります。月日のたつのは早いものです。その方は現在どうされているのであろうとふと心を暗くすることもあります。

またこんな嬉しいエピソードもあります。

京都で一人暮らしをした後、病院で亡くなられた男性の娘さんが十年来私とおつきあいをしてくれているということでした。

事情があつて子供の頃母につれられ父のもとを去った娘さんが、別れた父親の最期に再会して私とのかかわりを知り大変よろこんでいただき、以来十年長野県在住の彼女と私のおつきあいは続いています。

三歳の時別れた父親と四十歳近くなつて再会した時の感激は忘れられないと何回となく私に語ってくれました。

地域小学校の体育祭に賛助出演（筆者、前列左）



とても自慢にしている事を報告させていただいて終わりにしたいと思います。それは六年位前から現在も続けている手話コーラスです。

地域の中で聴覚障害の方を訪問するとき、またいろいろな場所で行なっている活動をするときに便利だと考えて、最初は指文字から始めたのですが、より楽しく練習ができるようにという意見があり手話コーラスとして出発したのです。最初の頃は一曲を仕上げるのに数ヶ月かか

っていた熟年コーラス隊でしたが、今では「民生委員の歌」はもとより最新のリズム感あふれる曲までマスターしています。

ちなみに現在は「負けないで」という曲に取り組んで四苦八苦しています。地域の小学生と舞台上で手話の競演をすることも年に何回かありますが、動きのぶくなった頭脳を少しでも活性化したいと孤軍奮闘です。子供達も一生懸命にあわせてくれます。

民生委員活動の中でも心から楽しませてもらえる一面をご紹介させていただきます。

私は冥慮につきる話だと一緒に泣いたり笑ったりしながらおつきあいを続けています。

「民生委員をやってよかった」と思う時が必ずくるから……くじけそうになった新任の委員さんをはげます一番の言葉としています。

温かい血のかよった仕事だと思っています。七十歳を迎え体力も気力もここが限界ではないかと思う反面ここまできたのだからもう少しがんばって「継続」ではなく「前進」をめざしたいと日々前をみながら活動が続いています。メンバーや家族の温かい協力のお

かげでここまでこられた事は申すまでもありませんが、私が内部努力として常に心がけてきたことに「会話」「話しあい」を大事にする、コミュニケーションを第一に考えてきたことをあげさせていたただきたいと思います。二十人のメンバーがお互いに希望や夢を語りあう中では嬉しい「案」が生まれ、「解決策」が考え出されます。

大切なことは、そんな環境を常に準備しておくことだと心がけてきたつもりです。

最後に不肖私が会長を務めております学区民生児童委員協議会が現在



京都市民生委員大会で手話コーラス披露（筆者、前列右から4番目）